

小高句麗国の領域と民族構成(上)

日野, 開三郎

<https://doi.org/10.15017/2236676>

出版情報 : 史淵. 104, pp.1-34, 1971-03-20. 九州大学文学部
バージョン :
権利関係 :



小高句麗国の領域と民族構成 (上)

日野 開三郎

一、小高句麗麗国の領域

小高句麗麗国の領域を明示した所伝はない。この国に関する史料が全体的に極めて乏しい現在、その領域を明示した所伝が残されていないのは止むを得ない所という外ないが、然しこれを究明する手掛りとなる間接史料は残されている。然も此の間接的史料は殆んど直接的記事に近い有力なものであり、且つ数個の多きに及んでいる。関係史料の乏しい小高句麗の研究に於いて、領域に就いて数個の有力な史料を見出し得ることは、まず以て幸せといふべきである。その第一は、旧唐書・地理志の安東都護府の靺鞨州であり、第二は新唐書・地理志に見える安東都督府の靺鞨州である。新唐書の渤海伝に見える府州制の記事は第三の史料であり、契丹の阿保機が敢行した遼東経略の経緯とその範圍に就いての所伝は第四の史料である。これら四個の史料に就いては、小高句麗国研究上の重要史料として、これまでに種々の角度から検討しており、それらの検討の結果から小高句麗麗国の領域も或る程度まで察見し得るのであるが、ここに更めて領域専考の立場から重ねて検討し、此の国の民族構成、産業・商業、行政制度等、国内の重要な諸問題を解明して行く基礎としての領域を究明することとする。

1 安東都護府の靺鞨十四州と建国以来の小高句麗麗国の領域

旧唐書^{卷三}地理志・河北道の安東都護府の条に、此の府の沿革を述べたのち

初置領靺鞨州十四。

小高句麗麗国の領域と民族構成 (上) (日野)

とあって、設置当初の府の羈縻州が十四であったと伝えている。これら十四の州名及びその現位置への比定に就いては既に詳述した所である。「初置」の一句は慎重な批判を要するが、それは便宜上あと廻しとして、まず記憶を新にするため此の十四州の州名とその現位置とを表示する。これら十四州を一括した地域を今の地図に照していえば、北は鉄嶺・開原^開附近に及び、東は興京（新賓県）稍々東方の地を含み、南は鴨緑江口右岸の地より蓋平を結ぶ線に達し、これら四点を結ぶ遼東の地、即ち大体漢初の遼東郡（第二玄菟郡設置前）の地を包括していたことになる。安東都護府は聖曆二年に一度廢止せられ、開元二年に復置を見、その間、都護府の任は安東都督府に引継がれていたこと、十四州の羈縻も都護府から都督府に引継がれて長く続いていたこと、旧唐書の地理志は開元二十八年の現状に基づいて書かれたものであり、従つて右十四州に対する都護府の羈縻も此の時の現状として受取り得るものであること等は先に詳考した所である。所が先掲の旧唐書・地理志の記事は明かに此れを安東都護府の初置の際の羈縻州なりと記している。即ち開元二十八年との間に大

安東都護府羈縻十四州表

州名	現位置	州名	現位置
新城州	撫順市東北の北関山城	遼城州	遼陽
哥勿州	木奇・興京より輯安に入る街道上の一地	建安州	蓋平東北二邦里餘の高麗城子
南蘇州	薩爾滸城（撫順東方約七十支里）	木底州	木奇西北水手堡子高麗大城（蘇子河中流）
蓋牟州	撫順千金寨西方の古城子	代那州	？
倉殿州	興京舊老城	磨米州	遼陽附近と推定
積利州	鴨緑江下流右岸の一地と推定	黎山州	遼陽東南方の一地と推定
延津州	鐵嶺附近	安市州	海城東南約三邦里の英城子

きな年代の開きがあることとなり、この点の解釈が新たな問題となってくる。

先ず「初置」の句から考えて見る。正確にいった初置の安東都護府は平壤に治し、大高句麗の城一百七十を以て四十二州を分置することとしたが、終に実現を見ぬままに遼東に引揚げたのであるから、十四州の羈縻を「初置」としている此の句を文字通りに受取って平壤時代からとすることは、事実の面から許されない。それは在遼東安東都護府に就いて言つた「初置」でなければならなくなる。都護府が正式に遼東に引揚げたのは儀鳳元年（六七六）で、引揚先は遼城州、次いで翌年新城州に移つた。従つて「初置」とは早くとも此の頃であつたと解しなければならぬ。この様に考えて再び旧唐書の地理志を顧るに、十四州列拳の首めに置かれてゐるのは新城州であり、また府の位置を長安より四千六百二十五里の所とし、遼西郡故城（復置都護府の治所）が長安より三千八百五十九里とあるのに対比すれば今の撫順に當る新城州となるから、旧唐書の地理志がいう安東都護府は新城州時代のものを指していることが明かであり、従つて「初置」はこの新城州への初置、即ち儀鳳二年をいつていることになる。更に遼東の州県制の沿革を観るに、先に詳考した如く、都護府が平壤から正式に引揚げる以前に早くも薛仁貴によって編成が進められており、更に新城州に府を徙した儀鳳二年には高句麗の降臣泉男生が府に参劃して州県制を整え、それによって編成がほぼ完成せられたと解せられるのであるから、「初置」の年をここまで遡らせることは、制度実施の進行とも矛盾なく、寧ろ調和のとれた解釈となる。かくて都護府の十四州羈縻は、地理志選述の一般基準年代に従えば開元二十八年であり、「初置」の句に従えば儀鳳二年であつたことになる。この様に、旧唐書・地理志の十四州羈縻に関する記事から、その年代に就いて、儀鳳二年頃と開元二十八年との二つの解釈が同時に出て来るのは、一見、矛盾を内包しているかの印象を与えるが、実は此の十四州羈縻が新城州に都護府を初めて置いた時も、開元二十八年當時に於いても、変りなく続いていた事実がそのまま反映せられてゐる記述と見るべきであらう。儀鳳二年から開元二十八年までは大約六十年を距っているが、十四州の羈縻は此の間を一貫して変り無かつたと解せられるのである。此の間には都護府の中廢時代があり、前都護府が新城州に在つたのに対し、復置の都護府は遼西におか

れており、こうした府の大きな変遷の中で十四州の羈縻に変わりが無かったと見るのは些が大勢にそぐわぬ感が伴わぬではないが、然し事実は変わりがなく、旧唐書の地理志が十四州の羈縻を府の初置当時のこととすると共に開元二十八年当時の状態として伝えても、そこに撞着を感じる必要はなかったものと思われる。但し十四州の羈縻に変わりが無かったということは、必ずしも此の地域の州数に増減の変化が全く無かったということにはならぬ。事実、開元時代の遼東には瀋州の名が伝えられ、又玄菟州の存していたことも窺えるのである。即ち州数は紛れもなく十四州以上のものがあつたのである。従つて此の六十年間の遼東の形勢を正確にいうならば、実際の州数は増したが都護府の羈縻州は増さず、当初の十四州を以て一貫したということになる。羈縻州は当然都護府の籍に登載せられていた筈である。州数が増して羈縻州が増していないということは、それら増置の州が都護府の籍に正式にのせられていなかったということになる。こうした増置州の問題は小高句麗国の州県制度の中で更めて専考することとする。

さて、小高句麗国は唐が安東都護府を中廢した時、その所管の統治権を繼承せしめる政權として、聖曆二年（六九九）、高句麗人に建てしめた王国で、国王の唐朝に於ける官僚としての資格は安東都督であつた。従つて右の十四州及び此の十四州を包む一帯の地は小高句麗国の領土として国王である安東都督にそのまま悉く引渡された筈である。かくて安東都護府の羈縻十四州を包括する遼東の地が建国当時からの小高句麗の領域であつたと推定せられるのである。また都護府が復置せられ、小高句麗国がその羈縻下に入った時も此の十四州の地がそのまま保持せられていたとすれば、此の地帯が小高句麗の領域たることは久しく変わらず、以て開元二十八年に及んだことになる。此の間に現れてくる瀋州や元菟州が都護府の籍に載っていないのは、それが小高句麗国の州ではあつたが、唐の正式に公認したものでなかつたためであらう。尚十四州は悉く大高句麗時代からの城州を繼承したものであり、従つて小高句麗の領域は大高句麗の領域の一部をなしていたことになる。小高句麗の増置した州は此の十四州を包括する地帯内に於いてであり、従つて増州による領域の拡大は開元二十八年までは見られ無かつた。

II 安東都督府の隸下二十三州と小高句麗国領域の拡張

新唐書^{卷四}地理志・靺鞨州の項に、「高麗降戸州十四・府九」と題して、先述の旧唐書の十四州の外に、衛桑・舍利・居素・越喜・去且の五州都督府と、諸比・鉄利・弘涅・捍漠の四州、合計九州を挙げ、これら二十三州を以て「隸安東都督府」と伝えている。この所伝に就いては先に詳考しているので、ここでは領域問題の見地からこれを回顧するに止める。

まず高麗降戸二十三州とあるはそのままに受取れない記事である。二十三州中の十四州は大高句麗時代からの城州を承継いだもので、正しく高麗降戸であるが、上掲九州は高麗の降戸ではない。突厥の瓦解に乗じた渤海国が北方に領土を拡大し、弘涅・越喜・鉄利等の純通古斯系靺鞨諸族を征服した時、此れに抵抗して逐われ亡命した部衆を以ておいたのが此の九州であり、従ってそれは濊貊系の高句麗人とは別種の純通古斯系諸族の州であり、その設置の年代はほぼ開元末天宝初年の交であったこと、先に詳考した如くである。

次に安東都督府は二十三州中の九都督府とは格を異にし、それら九都督府州を含む二十三州の上に立ってそれら全州を統轄する都督府であった。そして此の安東都督府の実体は小高句麗国であり、府の長官の安東都督は小高句麗国王であった。この関係を更に具体的にいえば、唐の行政体系に組み込まれた制度として見たものが安東都督府とその長官の都督であり、此の体系から離れて見たものが小高句麗国とその国王であって、前者は形式的、後者は実質的であった。小高句麗王は領民に対しては大高句麗の王統出身の国王であるが、唐に対してはその安東都督の官である。そして安東都督としてそれより上級の安東都護府の靺鞨下に立ち、此の関係を以て唐朝の勢力下に結びつけられていたのである。但し安東都督としての小高句麗王が都護府の靺鞨下におかれる様になったのは、開元二年以後、即ち中廢の都護府が復置せられてからである。前都護府に対しては靺鞨の関係はない。それは前都護府の廢止に際し、その統治権の継承機関として設けられたのが安東都督府であるからである。従って遼東の州が都護府より安東都督府の統轄に入ったのは此の都督府が置かれた聖曆二年以来で、当時の所管は先にあげた十四州であり、それが開元末・天宝初の交に二十三州に増加したわけである。

「隸安東都督府」は紛れなく正しい所伝であるが、同時にそれは都護府と二十三州との羈縻關係を否定するものではない。都督府の統督を経て更に復置都護府の羈縻、即ち唐の羈縻を受けていたのである。この様に観てくると、二十三州の地は、小高句麗国王が唐の安東都督として此れを支配しているという立場に立てば、安東都督府の所管であり、国王として支配しているという立場をとればその領土に外ならなかった。つまり「二十三州隸安東都督府」とは、「二十三州即小高句麗国地」というのと同じことであつたのである。要するに小高句麗国は開元末・天宝初の交に、従来の十四州に加えて新に九州を増領したのである。然しそれが領域の拡大にどう影響したかは九州の位置を考えた上でなければ明かにできない。

増領の九州に就いては、先に詳考した如く、越喜・鉄利・弘涅三州の位置が推定せられるのみで、他の六州は全く不明であるため、九州の増領と領域の拡大との關係を正確に究明することは望めないが、位置の知られる三州のみを基礎として考察するも、或る程度の見当をつけることができる様である。

鉄利州（今の奉天の西南彰駅站）、弘涅州（遼浜塔）の二州は明かに建国以来の小高句麗国の領域内に在る。詳しくいえばその西境の沿辺地帯に當るが、とにかく在来からの領域内である。不明六州の中に此の様な在来領域内におかれたものが尚あつたかどうかは推断できないが、とにかく此の二州の例によつて、九州中の一部は従来の領土の西方辺境方面におかれて旧領域を充實したといふことができる。

次に越喜州は今の新安鎮もしくは懷徳県方面、即ち東遼河の北方に比定せられる。此所は十四州を含む従来の領域の最北端に當る開原・鉄嶺方面から見ても更に遙か北方の地である。従つて、九州の増領により、小高句麗は一方に旧領域の充實を得ると共に、他方に新領域を遙か北方にまで展張したといふことになる。その北方は渤海の扶余府となる所であるから、越喜州以北に更に小高句麗国の領域が伸びていたとは見得ず、ここが新領域の北限であつたと考えられる。嘗て論述した如く、越喜州は開原以北の地に於ける代表的な大州であつた様であるが、それにしても越喜州と開原との中間の長

大な地に州の設置が全然なかったとは考え難い。位置不明の六州中には必ずや此の区間に置かれたものがあつたであろう。この様に考へて遼史^{卷二}地理志・東京道の項にある諸州を通観するに、今の八面城の地に比定せられる韓州の地は契丹が占領經營する以前から開けていたとの記事がある。此所は開原から農安（当時の扶余府）や上述の越喜州に出る古来の交通幹線上の一要地をなしていた所である。恐らく此の附近は六州の一がおかれていたであろう。また遼史^{卷三}地理志・上京道の項の末尾に附載せられた頭下州（貴族や功臣等の私有の州）の中に遼陽より東遼河北岸に至る中間の地に置かれたと推定せられる若干の頭下州が挙げられており、その或るものは明かに契丹時代に入って俘獲漢民を移して開置したものであるが、その外に契丹占領前から既に開けていたとある州もある。例えば韓州の北二百里に在りと伝えられる鳳州や、檀州（契丹の東京道の檀州で、中国の檀州とは別のもの）の西方二百里に在りと伝えられる遂州等はその数例である。前者は遼源附近、後者は康平附近であろうかと推定せられているものの、その位置は今尚不明である。然し大体遼河以西の地であつたことはほぼ紛れない。遂州はもと高州といい、契丹時代にはその附近の女直が契丹の辺患をなしたこともあつた。これら諸州の地も現位置不明の亡命鞞鞞六州の何れかと關係をもつていたのではないかと思われる。もし果して然りとすれば、開元末・天宝初の九州増置に依り、小高句麗の領域は、北方の東遼河方面に対してのみならず、遼河の流域に於いても此の河を越えてその西北方面にかなり擴張せられたこととなる。但し遼西への擴張に就いては尚今後の詳細な研究に俟たねばならぬ。そこでこの遼河西北方への領域擴張はしばらく疑問としておくが、開原以北東遼河北岸地帯への擴張は紛れない事実である。そこで此の地区はそれまで周隣のどの勢力の支配に属していたのかということが問題となる。渤海に属していなかつたことは、ここに置かれた越喜州が渤海との抗争に敗れて逃亡して来た越喜鞞鞞人を安置したものであつたことから推して明白であり、小高句麗の領外であつたことは、此の時初めてその勢力下におかれた所であるから、一層明白である。して見ると、ここは復興突厥の支配する所となつていたと解する外ない。突厥は南北朝の末に初めて勃興するや忽ち扶余（農安附近）を中心とするその南北一帯の鞞鞞及びその北方の室韋を従えており、その後、隋

に破られて一時衰え、高句麗のために此の地を奪われたが、隋末唐初の勢力再興と共に再び此の地域を支配していた。此の様な歴代反覆せられた形勢より類推して、開元時代の復興突厥がやはり此の地方を支配していたと見るのは、決して故なき想定ではあるまい。恐らく突厥は默嚙・毗伽両可汗時代にわたって此の地方を支配し、特に默嚙時代には小高句麗国まで羈縻していたのが、開元末の突厥の瓦解と共に支配力を喪い、因って唐は此の地方を新に羈縻下に収め、そこに同じく突厥の瓦解に乗じて北進した渤海に逐われて大挙亡命して来た純通古斯系靺鞨諸族を安置し、九州に分ち、それらを安東都督、即ち小高句麗王の隸下に編入し、安東都督を通して遼西郡故城の安東都護府の羈縻下に置いたのである。かうした処置には、当時既に河北方面を握っていた安祿山が必ずや関与していたであろう。この様に観てみると、小高句麗は開元末天宝初の交に至り、純通古斯系靺鞨諸族の九州を新に領民に加え、西北方に向って大いに領域を拡大したとはいえ、それは小高句麗内の国民的エネルギーの蓄積が齎した能動的な発展ではなく、宗主国唐の遼東政策を介して受容れた受動的な新形勢にすぎなかったのである。新領九州に対する小高句麗の支配がどの程度に強かったか、甚だ疑問という外なく、九州のうち、在来の領域内におかれた弘溼・鉄利等の州に対しては次第に支配を浸透させ得たとしても、北西面の遠隔地におかれた越喜州等に対しては此れを羈縻する程度以上には大きく出られなかったのではないかと思われる。

Ⅲ 渤海国十五府六十二州と安史の乱以後に於ける小高句麗国の領域

天宝十四年に勃発した安史の大乱は、世界的大帝国の威容を誇って来た唐を、全盛の極致から一挙に瀕死の奈落に叩き落した大事件で、アジアの国際情勢を一変させて終った。小高句麗国は、その隣接国家の一として、又唐朝に羈縻せられた諸国の一として、最も大きな影響を被り、乱を機として唐朝の保護を喪い、その羈縻から離されて渤海の属国となり、然も直轄領土同然の強い支配を受けることとなった。そこでこうした環境の大激変に見舞われた小高句麗国の領域に就いてその変化の有無が次の問題となってくる。そして此の問題の解答に手掛りを与えるのは新唐書^{卷一}二五^{卷一}渤海伝に見える五京

・十五府・六十二州、即ち渤海国の領域の記事である。尤もこの府州に就いては既に詳しく考説しているので、ここでは小高句麗国の領域究明に関係ある部分だけを取上げることとする。

新唐書の渤海伝に依れば、渤海はその領域を十五府に分ち、そのうちの五府に京制を施き、また府の下を若干の州に分っていた。即ち渤海の府はほぼ唐の藩道に当っていた。別に府の所屬に入らず、中央に直屬していた州が三あり、これを独奏州といった。唐や五代の直屬州に当る。伝にはそれらを総括した全州数を六十二と伝えているが、現行本には六十州の名が見えるのみで、二州名を逸している。十五府の中には未だ府治の現位置の判明しないものがあり、況んや六十州の州治はその大部分が不明のままである。然し主な府治の位置が判明すれば渤海の領域は略々察見可能である。そこでこれ迄の府治究明の成果に基づき、その西境に在ったものを拾い出すと

- 1 扶余府 吉林省・農安の西南
- 2 長嶺府 輝發河上流北山城子
- 3 涑州 吉林省・吉林、又は打牲烏拉

の二府（管下各二州）一州である。此の治所三点を結ぶ渤海国の西方国境線は、先に述べた小高句麗国の国初以来の東北の国境線とほぼ並行して此れを侵していない。又渤海の西南界は鴨綠江の河口に近く蒲石河の注入する所にある古（鼓）樓子附近に比定せられている泊灼（灼）城である。長嶺府治（註）と此の泊灼城とを結ぶ渤海西南境の界線は小高句麗国の建国以来の南部東境線とほぼ平行して此れを侵していない。即ち渤海が五京十五府三独奏州の制を仕上げた全盛時代に於いても、小高句麗国の東境は侵されることなく、その領域を全うしていたことが知られるのである。此の五京・十五府・六十二州の制は渤海の全盛時代を築いた宣王・大仁秀の治世のことを伝えたものであるといわれている。その在位は唐の憲宗の元和十三年二月から文宗の太和四年までで、足かけ十三年である。して見ると、渤海はその全盛時代に於いてさえ、終に小高句麗の領域は些かも侵犯しなかったこととなる。但し小高句麗を完全に渤海国の子国とし、その領域を直轄領地同

然に支配する態勢を完成したのも宣王・仁秀の時代であるから、実質的に直轄領土化した小高句麗の領域を今更名義の上でも直轄領に取上げる必要は無かつたのであろう。

当時、小高句麗の西境外に居た遊牧民族はその勢力概して振わず、契丹の阿保機が勃興するまで、渤海を制圧する強大勢力は現れなかつたのであるから、渤海の属国として殆んど直轄領土なみに扱われていた小高句麗国の西境を侵占するとはあり得なかつたと思われる。要するに、安史の乱後、小高句麗国は渤海の強い羈縻を受け、遂に直轄領土なみの支配を受けるに至つたが、却つてその為には領域の名義的保全が完全に保たれ、又その属国として受けていた保護に依り、西方からの侵占もなく、阿保機の勃興まで、領域の名義的保全は無疵のままであつたと推断せられるのである。

IV 契丹・太祖の遼東経略の範圍と小高句麗国末年の領域

契丹の太祖阿保機はその可汗即位四年前（唐の天復三年 \parallel 九〇三）及び一年前（唐の天祐三年 \parallel 九〇六）の二回にわたつて弘涅州以北越喜州の地に及ぶ遼河・東遼河二水の流域を経略した。このことは、それまで此の地方が遊牧勢力の支配外に在つたことを示す。時に彼は渤海国軍とは戦つていない。このことは、この地方が渤海国の領土でもなかつたことを示す。但し渤海が宗主権を握つていたことは先に述べた如くであるから、渤海に戦意があれば、此の契丹の侵占を黙視することなく必ずや起ち上つたであらうし、また宗主権の主張に伴う保護の義務から起ち上るべきであつた。それを渤海が黙視の態度に出たのは、渤海側の内部に大きな対立があつて動き難かつたからであるが、それにしても此所が渤海の直轄となつていれば、面子にかけても一戦は試みたであらう。遊牧勢力の支配外であり、渤海の直轄領でもなかつたとすれば、そこは小高句麗国の領域であつたことになる。即ち開元末・天宝初に小高句麗の領有に組入れられた此の地方の所屬關係は阿保機の侵占まで続いていたことになる。所で此の阿保機の侵占に対し小高句麗が抵抗の決戦を試みた形迹はない。それは長らく渤海の強力な支配の下に子国化していた小高句麗として、新興の阿保機の精銳に立向うだけの自力をも

っていないからであろう。また此の段階での阿保機の東進は、小高句麗国の建国以来の本土には殆んど手をつけず、両回の侵略とも弘湮・越喜・鉄利等の純通古斯系亡命鞅鞅の住域に止まっていた。このことが小高句麗の抵抗決意を鈍らせた一因であり、阿保機の作戦も此れを見越していたのかも知れない。阿保機の此の侵佔は小高句麗国が滅亡する十五年乃至二十年前に当る。また此の地域が小高句麗国の領有に組み込まれた開元末・天宝初から計えれば大約百六十年の長きにわたっている。要するに、純通古斯系を安置した小高句麗領土の西北部はその滅亡の十数年前まで小高句麗領として保たれていたのである。

阿保機の遼東経略は、小高句麗国の西北部を侵佔した二回の征戦後、しばらく鋭鋒を収めていたが、その神冊元年頃より再び盛んとなり、遼陽・瀋陽等の小高句麗国の心臓部を侵し、神冊三年には遼陽を陥れて遂に小高句麗国を滅した。その結果、遼河の流域はあげて契丹の領土となり、その東界は今の撫順（小高句麗の新城州、契丹の埴州）にまで及んだ。このことは、此の地方が滅亡の際まで小高句麗国の領土であったことを示す確証である。所が阿保機の経略はそれより以東、即ち蘇子河の流域や鴨綠江口右岸等の地域に及ばず、大体遼河の流域で停止した。阿保機はこれら東方の地区を差しおいたまま渤海国に挑戦し、北方の扶余府より侵入して此れを滅し、帰還の途中に陣歿した。このことは、一見、蘇子河流域等の地が小高句麗の領域から離れて渤海の直轄に移されていたのではないかとの印象を与えるが、直ちにそうとは断定できない。此の経略順序は当時の政治的・領土的関係に対応したのではなく、主として満洲の戦略地理に順応しており、いわば阿保機の作戦の巧味を示すものである。

小高句麗国領土の西北部を構成していた開原以北の遼河・東遼河流域及び伊通河流域、更にその北方の嫩江・洮児河の流域が、西方の遊牧勢力の勃興を見た場合、毎にその支配に帰したことは、先に突厥の例を以て説明した所である。伊通・東遼両河の流域はその中心の扶余の地を繞って西方の遊牧勢力と東方の通古斯系獮農勢力との分争点となり、激しい争奪の歴史を繰返している。南北朝以後に就いて見るも、此の地方に対する支配の推移は、高句麗（通）↓勿吉（通）↓突厥

（牧）↓高句麗↓突厥↓高句麗↓薛延陀（牧）↓復興突厥↓小高句麗（その実権は唐↓渤海）・渤海となっている。そして伊通・東遼二水の流域は常に獵農の通古斯系の住地であった。従って東方の通古斯系の代表勢力が此の地方の統合を欲するのは極めて当然であったといえる。これに対して民族的にも生活的にも全く異なる西方の遊牧勢力がその勃興と共に必ず此の地を覬い、又必ず此の地の支配をなしとげているのは、遊牧民族の塞外制覇にとってその支配が絶対必要であり、又比較的容易に成就せられたことを示すものである。遊牧勢力が此の地の支配を覬ったのは、此の地方の通古斯族を支配することによって、それより以東に住む通古斯系の主力を制圧せんがためであった。そして此の地方の侵占が比較的容易であったのは、主として自然地理の形勢が然らしめたのであって、此の容易さが又遊牧勢力をして此の地の侵占を欲念せしめる一誘因ともなっていた。

通古斯族の主力が拠る東部滿洲は山岳密林の地で、遊牧勢力の住地が平原草地であったのと正に対蹠的であった。平原草地に対応して騎馬疾駆の戦には長じた遊牧民族も山岳密林の戦は全く苦手で、東部滿洲に深入りした部隊は大きな損傷を受けて敗退することが多かった。所が伊通・東遼二水の流域は広潤な平地であり、その東南二面は張広才嶺・吉林哈達嶺等の高大な山地とその支脈や丘陵の密林に断ち切られているが、西北方はそのまま遊牧勢力の住地に展統していた。即ち遊牧民族にとり、此の地方の侵占は容易であるが、それ以東への進出は困難であったのである。ここに遊牧勢力がその勃興に当っては必ず此の地方を侵占して此所をそれ以東の通古斯系主力に対する固めの地とする理由が存していたのである。阿保機がその勃興の当初に早くも此の地方を侵占したのも全く同じ理由からで、彼が腦中に敵として描いていたのは、いうまでもなく渤海である。但し阿保機の侵占は東遼河流域に止まり、その北方の伊通河流域に及ばなかったが、それはここが渤海の直轄地であり、扶余府がおかれて常に勁兵が配備せられ、勃興当初の阿保機には未だこれに勝負を挑む自信がなかったからである。然し東遼河流域の侵占によって渤海・小高句麗に対する契丹の東方の固めは大きく強化せられたわけである。

西方の勢力が安奉鐵道に沿う古来の交通幹線に由つて遼陽方面より鴨綠江口を経て平壤方面に進軍せんとする場合、又は他の一幹線たる渾河・蘇子河に沿う街道に由つて輯安方面に出で更に平壤方面もしくは咸興平野に進軍せんとする場合、必ず農安地方、即ち古への扶余地方を抑えておく必要があつた。それは此の地方の軍兵が開原附近の山地、即ち古への所謂金山を越えて南下すれば、東方に深入した遠征軍は忽ち後方遮断の重大な危険に陥るからである。されば古來名將といわれている者の滿洲作戰を見るに、三国時代の毋丘陔の高句麗遠征にしても、唐の李勣の高句麗討滅の役にしても、必ず同時に扶余地方を制圧することによって全局の勝利を克ち得ている。阿保機が遼河流域以東に経略の兵を進出させなかつたのは、こうした滿洲の戰略地理をよく会得していた名将であつたことを示すもので、必ずしも此の地方が小高句麗國を離れて渤海の直轄領土に歸していたことを示すものとはいえない。蘇子河流域や鴨綠江口方面にまで進軍するためには、一応扶余方面を叩いておかねばならなかつたのである。扶余府は渤海十五府の一として渤海の西境を守る要衝となつていたのであるから、此所を叩くからには渤海國との正面衝突への發展を覚悟しなければならぬ。かくて阿保機は小高句麗を滅し乍らその領域の東部をなす蘇子河流域や下流鴨江流域の地を経略することなく、そのままにして扶余府を屠り渤海討滅作戰を進めたのである。この様に考えると、小高句麗國を滅した阿保機がたとえ蘇子河流域等の地を侵占しなかつたとしても、それを以て此の地方が小高句麗の領域外になつていたと解する必要は毛頭ない。寧ろ渤海の小高句麗不占領の一貫した方針に照して最後まで小高句麗國の領土であつたと見るのが妥当である。

以上を要するに、今の開原・興京・鴨綠江口右岸・蓋平の四点を結ぶ遼東の地が建国以來の小高句麗の領土、即ち根本領土であり、開元末・天宝初の交に至つて開原以北の懷徳・新安鎮に至る遼河・東遼河二水の流域を領土に加え、此の全領土は此の國の滅亡寸前迄保持せられていたのである。所で此の様に小高句麗國の領域を考定すると、遼東半島の地が終始一貫して小高句麗の領土になつていないことになり、その所屬はどうなつていたかということが問題として残されることになる。

唐の勢威が失墜する天宝末以前に於いては、遼東半島は山東半島の防衛、即ち東北海面防衛の前哨地として唐が領有していた。開元二十五年の式といわれる唐水部式に、今の旅順にあたる当時の都里鎮に唐の鎮兵がおかれ、山東の登・萊州方面より海路補給をしていたことが記されていたことは既に述べた所であるが、都里鎮に駐兵していた以上、今の金州湾・復州湾等の傍近海港地も当然唐の勢力下に属していた筈である。然し此れは安史の乱を界として渤海側の勢力に帰したものと推測せられる。鴨緑江口の泊灼城を海口として遼東半島沿いに山東半島の登州に往来する航路は、渤海の朝貢道、即ち対唐交通の正路であった。従って遼東半島の東岸は渤海の勢力下に維持せられていたであろう。然し遼東半島に対する支配は、唐の場合も渤海の場合も、海上交通の要衝としての沿岸港口に重点をおき、陸上内部に深く浸透をはかった形迹は認められない。此の地方の全体的な開發が史上の問題として重要性を帯びてくるのは、遼の中葉以後、ここに蔓延していた曷蘇館女直の経略が進められる様になってからである。小高句麗国時代に於いては、海港地を除くの外、此の地方は未だ重要性を有つに至らず、その領有権を明確に主張する必要は周隣のどの国にも痛感せられていなかったであろう。

註

1 十四州の位置のみからいえば、その北限は延津州の地である今の鐵嶺におかなければならぬが、この地方の歴史地理から考えて開原をも領内に入れ、この附近を北限とするのが妥当の様に思われる。開原の地に比定せられる州名は十四州中に無いが、恐らく此所は延津川の区域内に入っていたのであろう。遼東の広大な地に十四州しか置かれていないことは、各州の管域が一般に極めて疎濶であったことを意味するから、延津州の管域が開原にまで及んでいたと見ることは強ち無理ではない。又開原の地が他の地におかれた州の管域に編入せられて小高句麗に属していた形迹が遼史の中に看取せられる。その説明は些か末枝に走る嫌いがあるので、ここには省略するが、開原を延津州の一部と見る解釈の参考となるので、遼史の所伝を一言だけしておく。

2 史淵四一輯以後連載の拙稿「粟末靺鞨の対外関係」参照。

3 滿洲歴史地理第二卷所載、箭内博士「元代に於ける滿洲の強域」による。

4 註2と同じ。

5 その例は遼代に屢々行われた奥滿洲の兀惹征伐に見られるが、その紹介は長くなるので略す。

二、小高句麗國の民族構成

小高句麗國の國民が高句麗人をその民族構成の主体としていたことはいうまでもないが、然し高句麗人に限られていたのではない。高句麗人以外の濊貊族や純通古斯族・漢人・韓族などをも含み、また二百余年の長い間にはそれら諸族の間に盛衰混融があり、民族構成の内容とその推移とは相当複雑なものがあつた。小高句麗國に関する史料の乏少は此の方面の考察に於いても多大の制約を被らざるを得ないが、できるだけ追究を進めることとする。

1 建国当初の民族構成

建国当初のこの國の國民は、高句麗人を主とし、これに若干の粟末靺鞨が加わっており、此の両者は同血同語の同民族で、いうまでもなく濊貊種である。此の外に漢人がおり、更に韓民族の百濟人が含まれていた。これら諸族の個々に就いて考説する。

(1) 高句麗人

小高句麗建国以来の領土である開原以南の遼東地方は、先秦時代に早くも漢人の入植蔓延する所となり、戰國の七雄として知られる河北の燕が遼東郡を設置してから、秦・前漢・後漢と代々これを継承し、後漢末より三国にかけては公孫氏の拠る所となり、その滅亡後は再び中国の支配に帰したが、晉の南渡後、北支の漢人振わずして五胡十六國の跳梁するに及び、終に高句麗の侵占する所となつた。かくて遼東に於ける漢民族はその東方の半島に於ける樂浪・帶方二郡の漢民族と共に次第に衰散凋落し、代つて高句麗人が入植蕃衍することとなつた。隋唐時代に於ける遼東の主住民は全く高句麗人

となり、その戸口は夥しい数に達していた。その総計数は知る由もないが、その繁殖の一端を窺う資料は、貞觀十九年以後に展開せられた唐と高句麗との遼東に於ける攻防戦に聯関して若干伝えられている。

冊府元龜卷一七帝王部・親征門・貞觀十九年四月の条に、唐が高句麗の蓋牟城を抜いたことを述べて

癸亥。李勣拔蓋牟城。獲戸口二万余人。倉糧十余万石。

とあり、戸口（非戦闘員）二万余人を俘獲したと伝えている。これによって蓋牟城の管内には少くとも二三万人以上の住民が居たことを知り得る。註同卷には続いて五月乙巳の条に

拔卑沙城。中略虜其男女八千口。

とあり、卑沙城管内の住民が少くとも一万は突破していたことが察せられる。卑沙城は今の大連灣の北岸に近い大和尚山に比定せられている。註続いて同月甲申の条には遼東城を陥れたことを述べ

俘其勝兵万余人。口四万。収倉粟五十万石。云云。

とて、俘虜の兵一万、住民四万を獲たとある。住民の総数は少くとも五万を突破していた筈である。続いて六月丁酉の条に白巖城を降したことを述べ

城主孫伐音請降。以城為巖州。獲士女一万。勝兵一千四百。倉廩二万八千石。註

とて、兵一千四百、住民万余を俘獲したとある。卑沙（奢）城は小高句麗國の領土と關係が薄いので、これを差し置き、蓋牟・遼東・白巖の三城・州に就いて見るに、俘獲の住民合計七万余、兵一万数千（蓋牟州は不明）、糧穀六十数万石となる。続いて十月の条に

凡徙遼・蓋・巖三州戸口入内地。前後七万余人。註

とあるから、この三城州の俘虜男女七万余人は悉く内地に遷される手筈になったことが知られる。此の七万余人は、或は戦禍を城中に避け、或は戦場の附近に隠れていたために俘虜となった者の数で、決して州民の総数ではない。俘獲を免れ

た者も多くいた筈で、寧ろそれが俘獲せられた者よりも遙かに多かつたと見るべきであろう。続いて同月癸丑の条には
 詔曰。尅其玄菟・横山・蓋牟・磨米・遼東・白巖・卑沙・麦谷・銀山・後黄等一十余城。凡獲戸六万。口十有八万以下後引
 とあつて、玄菟以下十余城の俘獲住民六万戸。十八万余人に達したと伝えている。但しこの六万戸に就いては、資治通鑑
 卷一 唐紀・貞觀十九年十月の条の七万人遷徙の記事の胡註に、実録の十月癸丑の詔を引いて「獲戸十万・口十有八万」と
 九八 唐紀・貞觀十九年十月の条の七万人遷徙の記事の胡註に、実録の十月癸丑の詔を引いて「獲戸十万・口十有八万」と
 て、十万戸と伝えている。実録を引いている点からすればの此十万戸が正しい様に思われぬではないが、この喰違ひは恐
 らく数字の誤写に由つて生じたのであらうか
 貞觀十九年太宗占領高句麗十城表

城名	小高句麗州名	現位	置	俘獲数
玄菟		撫順市新市街永安臺		
横山		撫順・奉天方面の一地？		
蓋牟	蓋牟州	撫順千金寨西方古城子		民二萬餘人
磨米	磨米州	遼陽附近？		兵萬餘人
遼東	遼東州	遼陽		民四萬餘人
白巖		遼陽・本溪湖間太子河北岸燕州城		兵一千四百人
卑沙		大連灣北岸大和尚山		民八千餘人
麥谷		不明		
銀山		海城・岫巖間の地？		
後黄		同右		
合計				民六萬戸十八萬餘人

ら、俄かに何れが是と断定することは許され
 ない。又冊府元龜の上掲記事は十余城と称し
 てただ十城の名を列するに止めているが、資
 治通鑑は初めからはっきりと十城と記してい
 る。この十城の現位置を従来の研究に於いて
 知られている限り表示すれば上の如くであ
 る。参考のため小高句麗国の十四州との関係
 及び上述する所によつて各城の俘獲数の明か
 なものを附記しておく。各州の位置は必ずし
 もすべてが明確でないが、遼東半島の卑沙城
 （これは海軍が攻略）を除けば、あとは大体
 遼河左岸の沿流地域である。高句麗国に侵入
 せんとした唐軍の攻撃が先ずその西境の地に

集中せられるのは必然のことであるから、陸軍が攻撃した九城の位置が遼河左岸の地に在ったのは当然といえる。そしてそこは後の小高句麗国の領土の中心部となった所である。この地帯に属する九城であげた俘獲の住民が約六万（別伝十萬）戸、十八万余人であったという。この中には卑沙城の八千余人が含まれているが、十八万余人の余人は、常識的に考へて数千人の可能性が大きいのであるから、八千人を引いても、尚十八万の数は大して欠けなかったと見得るであろう。旧唐書卷九九高麗伝に依るに、安市城の救援に馳せ向つた高句麗の大軍を唐兵が迎えうって大破し投降せしめたことを述べたのち

高麗国震駭。后黄城及銀城並自拔。

とあり、新唐書卷二〇高麗伝にも同じ記事があつて、后（後）黄・銀の二城は唐軍の攻撃を受ける前に自ら抜いて逃れ去つたものであるというから、この二城ではさしたる俘獲はなかつたと考えられ、結局、六万（別伝十萬）戸十八万人の俘獲は主として七城であげたことになる。大小取りまぜて一城の俘獲平均戸数は一万弱（六万戸の場合）、口数は三万弱となる。もし六万戸の所伝をすてて十万戸の伝をとれば、一州の平均は一万五千となる。泉男生墓誌註に

公男生率国内城名等六城十余万户。云云。

とて、今の輯安に比定せられている国内城及びその附近の諸城、合わせて六城の管民を十余万戸と伝え、一城平均が約二万戸に達していることを参考にすれば、輯安方面よりも経済の進んだ遼河流域地帯の一城平均戸数も恐らく二万戸を下ることはなかつたことが察せられ、獲俘の一城平均一万户はもとより、仮に一万五千戸の数字を採つても、決して現実註にあり得ない誇大の数字ではないといえる。然しここでは控え目に六万戸の数字に従つて論を進めることとする。

満洲通古斯族は、濊貊註たる純通古斯たるを問わず、一戸大約六七口、一戸に一・五人乃至二人の兵丁を出し得るのが史を通じての平均であるから、先の六万戸を基礎にしてその本来の口数を計出すると大約四千万人前後となる。従つて俘獲口数十八万は、その半分弱を俘え、半分強を逸した計算となる。俘獲せられなかつた戸を考えると、俘獲よりも隠残

の戸口の方が遙かに多かったことになる。資治通鑑^{卷一}九八唐紀・貞觀十九年十月の条に

諸軍所虜高麗民万四千口。先集幽州。以賞軍士。上愍其父子夫婦離散。命有司平其直。悉以錢布贖為民。云云。

とあって、唐の諸軍に俘えられ、幽州に送られて奴婢に充てられんとした高句麗人一万四千人のことが伝えられている。此の俘虜は諸軍が戦陣の間に得たもので、集団投降によって唐朝の俘虜となった先の十八万とは別のものである。太宗は將士を励ますために、戦士が闘って俘えた高句麗人はその戦士に奴隸として与えることを約束し、こうした条件の捕虜として幽州まで送られて来たのが右の一万四千人で、太宗はこれを錢や布で買上げて奴隸から解放し民としてやったのである。六万戸の俘を出した七城は遼東の全城数の一部にすぎない。従って全城数をくるめた遼東の総戸口数は七城の数より遙かに多かったわけで、七城の俘戸六万、その本来の家族推定数約四十万、此れに俘獲を免れた戸口数を加えたものより更に遙かに多い数字が遼東の高麗人戸口ということになる。いかに少く見積っても百万口は優に突破していたであろう。後年に唐が高句麗を滅した時、高句麗の城数は一百七十六、載籍戸数は六十九万七千であったと伝えられている。口数は五百万程度と推計せられる。尤も此の七十万戸・五百万口に近い国民の族種に就いては別に考えなければならぬが、とにかく籍帳口数は五百万人に近かったのである。遼東は高句麗内に於いて経済的に最も重要な地であり、且つ地域も廣大であったのであるから、大約五百万人の中の百万以上を占めていたことは大勢的に充分認められる。

唐の遠征軍を邀えた高句麗が遼東に投入駆使した兵力は頗る大きかった。冊府元龜^{卷九}九外臣部・備禦門・貞觀十九年七月の条に、唐の安市城攻撃に於ける軍略會議に、長孫無忌が述べた言を載せて

今建安・新城賊十余万。

とある。この数字をそのまま鵜呑みにすることはできないが、守城兵の規模の大きかったことを窺う参考にはなる。又遼東城が陥った時、唐に俘えられた者は勝兵万余人と男女四万口とであったが、資治通鑑^{卷一}九七唐紀・貞觀十九年五月の条に依れば、遼東城最後の総攻撃に屠った者万余人とあるから、守城総兵力は合せて三万人近くに達していたことになる。建

安・安市等、唐の猛攻を最後まで支え抜いた堅城や新城等の要城にはやはり万を以て計える守兵を配していたであろう。遼東全城に配していた兵力の総数は夥しいものであったであろう。但しそれらが総て常備兵力であったわけではない。或は後方から増援し、或は恐らく管内の丁男を臨時に徴集した非常最大限の兵力で、常備兵力に数倍するものであったと思われる。また守城兵の外に、各城塞の危急に応じて出動赴援する機動兵力も小さく無かった。そしてそれは大抵後方傍近の諸城から繰出されるものであった。冊府元龜卷九外臣部・征討門・貞觀二十二年六月の条に、唐が高句麗の泊沟城を攻撃した時のことを述べ

高麗遣將高文率馬鳥之誤骨・安地諸城兵三万余人。

とて、烏骨城（今の鳳凰城）・安地（安市）城等の兵三万余人を以て赴援せしめたとあり、又同書卷一三五帝王部・好辺功門・顯慶三年六月の条に

薛仁貴率兵攻高麗之衆烽鎮。即拔之。斬首四百級。生擒首領以下百余人。俄而高麗遣其大將立方婁率衆三万人來拒官軍。

とある等は、高句麗の赴援軍が万人単位の規模を以て機動する場合の少くなかったことを示すものである。更に大規模な例さえ見られるのであるが、便宜上、後文に紹介する。冊府元龜卷一七帝王部・親征門・貞觀十九年十月癸丑の条の詔に、遼東の役に於いて特に激戦地となった新城・駐蹕・建安の三攻防戦の戦果をあげて

其新城・駐蹕・建安合三大陣。前後斬首四万余級。

とある。先に一言した安市城の救援軍を破った際の二万余、遼東城攻陥の際の一万余を合せると、それだけで既に八万余の高句麗兵の戦死となる。その他諸処の戦死を総計すれば十万にも近かったであろう。俘虜を加えた高句麗軍の総損害は頗る大きなものとなる。それにも拘らず、高句麗の遼東防衛力は減退を見せていないのであるから、その軍事力は余程大きかったといわねばならぬ。勿論、これらの救援兵力数や戦死数は、唐の遠征軍が自己の戦功を大きく見せるための報告

に基ずくもので、そこにかんりの誇張が含まれていると見なければならぬが、それにしても兵力量の大きかったことには紛れなく、そうした兵員供給源としての住民戸口数を小さく見るとは許されない。然し此の兵力の民族構成を考えなければ、折角の兵力量も国民の民族構成を研究する助けにならぬ。

高句麗国軍の構成を全般的に見た場合、その中心はいうまでもなく高句麗人で、此れに同じ血族であり、直轄領民でもあった濊貊系の靺鞨、即ち粟末・白山靺鞨を加えていた。^註遼東の高句麗軍も同様で、此の地域で多く使われていた靺鞨人は主として地理的に近い粟末人であった。高句麗は彼等の勁悍を利用して、軍の先鋒、奇襲、後方迂廻、遊撃等の危険またわ困難な任務に当らせていた。遼東の戦に出撃していたのは、輝発河や伊通河、北流松花江（最下流域を除く）等に拡がる粟末靺鞨が主で、白山靺鞨は主に南方の半島方面に利用せられていた。遼東に於ける高句麗国軍のこうした構成を証示する二三の例をあげておく。

冊府元龜^{卷一}一七帝王部・親征門・貞觀十九年六月の条に

高麗北部靺鞨（高延壽）^註・高惠真率高麗・靺鞨之衆十五萬。以援安市城。^中斬首二萬級。^中高延壽・高惠真率三萬六千八百人請降、

とあって、安市城の救援に馳せつけた高句麗国軍は十五万と称せられ、高句麗人・靺鞨人より編成せられていたこと、唐はこれを撃破して斬首二万級の戦果をあげたこと、高句麗国軍は敗兵約三万七千を以て降ったこと等を述べている。但し斬首は同書^{卷一}〇九帝王部・料敵門に三万とあり、資治通鑑には二万余とある。料敵門の三万は恐らく誤伝で、通鑑等の二万余が正しい所伝であろう。総兵力の十五万や斬首二万の数字には誇称があるにしても、投降者の三万七千は実数であったことが察せられるから、投降戦死が合せて五万を越えたことは略々確かであり、散亡兵を加えて約十万近くの救援大兵力であったことは疑いない。右の続きには此の時の戦利品を伝えて

獲馬五万匹・牛五万頭。光明甲一万領。他戰機械称之。

とあり、牛馬各五万、甲冑一万、その他多数に及んだという。此れは安市城への補給物資とそれを運ぶ牛車・駄馬及び戦馬等であろう。高句麗が此の救援軍に大きく期待し、戦局の好転を願っていたことが察せられる。救援軍が唐に投降したと聞いた高句麗が震駭し、後黄・銀二城の兵が自ら抜いて逃れ去ったというのも肯ける所である。所で右記事の前段には、此の投降軍の内訳及びその処置を伝えて

簡穉薩已下及酋首三千五百人。授以戎秩。遷之内地。余衆三万余人。並釈俘放還平壤。中略。鞞鞞三千三百人。尽坑殺之。

とある。即ち三万六千八百人中の一割に足らぬ三千三百人が鞞鞞、あとの三万三千五百人が高句麗人であったのである。尚右記事中に「放還平壤」とあるは、必ずしも文字通りに受取るべきであるまい。十万近くの大部隊と救援用の大量の物資とが遙か遠くの平壤からゴトゴトやって来たと見るよりも、背後の傍近地から送り出され急走して来たと見る方が穏当に思われる。「放還平壤」は「放還高麗本国」の意味であろう。鞞鞞は粟末部と解せられる。註15此の一例は、高句麗国軍が高句麗人を主力とし、これに濊貊系鞞鞞人を加えて構成せられていたことを、具体的な数字を以て証明している好史料といえよう。なお総章元年の高句麗討滅戦に於いて唐が新城を抜いた時、これを奪還せんとして繰出して来た高句麗国軍に就いて、旧唐書九〇契苾何力伝に

高麗有衆十五万。屯於遼水。又引鞞鞞数万。扼南蘇城。

とある記事のうち。遼水に屯した十五万の高麗兵とは伊通河方面居住の粟末鞞鞞を混えた高句麗国軍で、此れは薛仁貴のために斬首五万級以上といわれる損害を受けて敗退しており、又南蘇城に扼った鞞鞞も粟末部で、輝発河方面から徴集せられ、守城の高句麗兵に力を協せていたのであるが、契苾何力に打破られている。註16

以上の挙例により、高句麗が遼東で動員し得た国軍の最高兵力量は十万を以て計え、その国軍の構成は高句麗人を主力とし、これに主として粟末部の鞞鞞人を協力させていたことが確認せられるであろう。勿論、この大兵力は緩急に際して

遼東外の地から増援せられたものをも含んでいたであろうが、高句麗は唐の外に新羅をも敵とし、その北上の勢に備えて南境の防備を固めなければならなかったし、又唐の水軍の山東半島からの来襲に対して鴨緑江口から平壤に至る海岸の地を固める必要もあつたのであるから、遼東外からの増援兵力を大きく見ることは適切でなく、大兵力の殆んどは遼東現地とその近接地からの徴集であつたと見るべきである。こうした制約の下での兵力増強には、高句麗人の外に粟末靺鞨の協力が必要であつたわけである。然し国軍の大部分は高句麗人であり、然もその大兵力の殆んどが遼東現地での徴集であつたとすれば、これだけの兵員を供給した遼東の高句麗人はどう少く見ても百万人を大きく越えていたと解しなければならぬ。そして遼東開発の歴史から考えて、百万人を大きく越える民族は此の地域の主任民であつたと考えて差支えない。高句麗人が遼東の主任民であつたことは、高句麗を滅したのちの唐が遼東統治のために立てた施策の中にもその反映が見出される。

安東都護として高句麗討滅後に於ける遼東統治に卓絶した功績を残した薛仁貴の施策方針が、「撫孤存老、檢制盜賊、隨材任職、褒崇節義、以て高麗士衆の人心を收攬する」に在つたこと、半島に高句麗遺衆の叛乱が勃発すると、遼東に此れに呼応する者があり、安市城が叛いたこと等は、高句麗滅亡以後に於いても遼東に於ける住民の主力が高句麗人で、その勢力が尚相当強かつたことを前提として初めて理解し得る所である。また高句麗を滅した唐が、総章二年五月、高句麗故領の豪民二万八千二百を中国の内地、特に東南・西南・西北支那の辺陲に驅徙して遺民の蹶起を未然に抑えんとしたと、此の驅逐は半島のみならず遼東の高句麗人にも及び、半島方面の者は海路に由つて山東の萊州(後の登州の地)より、遼東の者は陸路營州より逐次發遣したこと等は、先に詳しく考説した所であるが、この遼東からの豪民驅逐も亦此の地方の高句麗人の勢力が強大で制し難かつたことを示す一証といふことができる。この様な高句麗人繁衍の地に建てられた小高句麗国の民族構成が高句麗人を最大の要素としていたことは自明のことといふべきであるが、然し大高句麗の末年に大いに繁衍していた高句麗人の戸口がそのままの状態の小高句麗国時代に引継がれて行つたと速断することは許されない。

高句麗の遺民は独立恢復の強烈な意欲に燃え、唐の支配に強い反感を抱いていた。唐が遼東から朝鮮半島に及ぶ大高句麗の故領一帯から遺民の酋豪二万八千余戸を狩出して中国の僻地に分散徙置したのは、この様な反唐感情に対処するためであった。降って安東都護府が正式に平壤から遼東に後退すると、儀鳳二年、中国に俘えられていた先の高句麗王高藏を遼東に遣し帰し、また前に中国内に移されていた高句麗戸をも遼東に遷したのも、やはり高句麗人の反唐感情を和げるための手であった。然し高藏は忽ち靺鞨と通じて叛乱をはかったので中国に連れ戻され、高句麗戸も貧弱者を除いて再び中国に遷された。こうした強い反唐感情から、その支配を免れんとする高句麗遺民は、半島居住の者は新羅に、遼東居住の者は靺鞨の間に散亡した。更に遼東居住の者は突厥復興の兆を見るやその方面にも投入した。かくて、旧唐書の高麗伝に、「自是高麗旧戸在安東者漸寡少。分投突厥及靺鞨等」とある如く、遼東高句麗人の数は一時次第に減少して行つたと推測せられるのである。思うに、^{註17} 大国高句麗の敗亡以後、遼東の高句麗人が遽に勢を失い、従来の繁衍を保ち得なかつたのは、止むを得ない所であつたといえよう。然し乍らたとえ絶対数はかなり減少したとしても、彼等が遼東の住民たる位置は動かなかつたと見なければならぬ。さもなければ、聖曆中に至り唐が此所に高氏の嫡系を送つて小高句麗を建てしめ、それが実を結んだ所以は説明できないことになる。要するに、小高句麗建国当初の中心民族は高句麗人で、その戸口数は大高句麗時代の繁衍に比して減縮していたとしても、尚遼東の住民たる位置を保っていたのである。大高句麗時代の繁栄に比すれば、地域は狭まり多くの逃散戸口を出していたとはいへ、その数は恐らく尚数十万人を算していたであらう。

小高句麗建国当時の十四州の名は既に大高句麗時代の城州名として史書に散見する。中には夙く南北朝時代より大高句麗の名城として史に著れているものもある。それらの名を左に対比表示する。（出典は代表的なものを只一つだけ示して他は略す）この表を一覧すれば明瞭な如く、小高句麗の十四州は大高句麗の城州を承継いたものであり、従つてその州民が高句麗人を主体としていたことも自明となる。勿論、大高句麗時代に於ける城州の名は此れよりも遥かに多く、三国史

の十四州名を列記したのち、

凡此十四州。並無城池。是高麗降戸。散此諸軍鎮。以其酋渠為都督刺史羈縻之。天寶領戸五千七百一十八。口一万余。千一百五十六。

とあり、此れ亦十四州の天寶年間の高句麗戸数が五千七百余であったかに受取られ易い記述となっている。然し此れに就いても既に詳考した所で、ここに天寶というはその十一年と解せられ、時の都護府は遼西郡故城に在り、その附近におかれた安東・汝羅の両守捉と懷遠・保定の両軍、更にその東方に置かれた巫閭・懷遠・裏平の三守捉等、合計七軍鎮は州格としての此の都護府の管内に在った。五千七百余の戸数はこれら七軍鎮を包擁する州格都護府所管内の漢人土戸数であつて、高句麗戸とはやはり関係のないものである。

(2) 粟末靺鞨人

隋は高句麗を脅懾すべく大軍を遼東に送つたが、却つて大敗し自ら滅亡するの端緒を開いた。次の唐朝も貞觀十九年の第一回出兵以來總章元年の討滅成功まで（六四五～六六八）、二十余年間を通じて遼東に軍を送ること前後七回に及び、境上地帯に於いて激しい攻防戦を繰返した。高句麗の西境は貞觀十九年以後殆んど戦時態勢に入り、此の状態は二十余年間続いたわけである。此の攻争に靺鞨人、特に粟末部人が高句麗国軍構成の一要素として終始協従し、よく奮戦したことは、これまでに一再ならず言及した所である。粟末靺鞨の原住地は開原より北、特に伊通河流域、及び此の河水との合流点附近より上流の北流松花江流域、輝發河流域等で、後の小高句麗の本土とは明かに外れている地域であつた。然し遼河流域一帯の高句麗の防備が戦時態勢の下に二十余年も継続した唐初の時代に於いて、粟末部人中の或る者は專業の戦士となつて要衝の城傍に移住し、その数も少くなかつたのではないかと思われる。冊府元龜卷三將帥部・立功門に

張儉。中。後為檢校營州都督府事。營州所管契丹・奚・霫・靺鞨諸蕃皆隣境。粟末靺鞨最近。高麗引衆數千來寇。

云々。

とあり、同書卷九外臣部・交侵門・永徽五年十月の条に

高麗遣其将安固。率高麗・靺鞨兵侵契丹。松漠都督李窟哥發騎禦之。戰于新城。

とある等、遼東・遼西に於ける靺鞨の軍事的活躍は、彼等が遼河沿流地帯に居を定めていたと見る場合にその状況がよりよく理解できる様に思われる。尚右両記事の第一は、資治通鑑卷一唐紀・貞觀十八年七月甲午の条によつて、第一回の衝突の際のことであつたことが確かめられる。不幸、粟末靺鞨の遼東移住を確証する極め手の史料を得ないが、大勢的に此の推測は先ず外れていないものと信ぜられる。

粟末靺鞨は夫余族の裔で、高句麗人とは同源・同語の同じ濊貊種である。従つてもし彼等が遼東に入つて高句麗人の間に生活し、その風習の中に融け込めば、それは高句麗人にならない者となつた筈である。また逆に、この様な高句麗と判別し難い粟末靺鞨人の群がいたとすれば、それは粟末靺鞨人の遼東移住を推証する重要な参考となる。こう考へて、渤海建国の中心となつた集団を見るに、ほぼこれに該当する者のあつたことが認められる。

旧唐書卷九渤海伝の劈頭に

渤海靺鞨大祚榮者。本高麗別種也。高麗既滅。祚榮率家屬徙居營州。

とて、渤海の始祖大祚榮が高句麗人の別種であつたこと、高句麗が滅んだのち營州に徙居してゐたこと等を記している。万歳通天中、營州城傍の契丹人李尽忠等が叛乱を起した際、そのどさくさに乗じて奥滿洲に通れ歸つた大祚榮集団の建てた国が震、即ち後の渤海国である。隙ありと見て遁走した彼等の營州徙居は恐らく自由移民でなく強制驅逐であつたのであろう。所で此の高麗の別種という「別種」の内容はこれだけでは判らない。所が新唐書卷二九渤海伝の劈頭には

渤海。本粟末靺鞨附高麗者。姓大氏。

とあつて、大祚榮を粟末靺鞨の出身で高句麗に附してゐた者と説明している。旧唐書にいう「高麗別種」とはこうした関

係を表現したものであろう。所で粟末靺鞨はすべて高句麗に隸属しその直轄領民とせられていたのであるから、もし「高麗別種」が単にこうした臣属関係を表しているだけのものではあつたとすれば、特に大祚栄一派に就いて「高麗別種」という必要は無く、又「附高麗者」と特に断る必要もない。ただ粟末靺鞨とたっただけで、嘗て高句麗に臣属していたことは自ら明かであつたのである。特に「附高麗者」と断つてゐるのは、その附隸の關係が一般の者より格別深密であつたために相違なく、更に「高麗別種」と表現せられているのは、その深密な附隸關係を通して彼等が事実上高句麗人化していたためでなければならぬ。恐らく彼等は粟末靺鞨の出身ではあつたが、高句麗の本土である遼東方面に入住し、そこですっかり高句麗人化し、高句麗滅亡の際に捕えられて營州におかれることとなつたのであろう。尤も唐は高句麗討滅の際に扶余城をも陥れて此の地方の粟末靺鞨に痛撃を加へ大損害を与えてゐるから、彼等は或は此の地方の出身で、その際に捕えられたのかも知れない。然したとえそうであつたにしても、彼等が「高麗別種」といわれるまでに高句麗化してゐるのは、彼等が嘗ては長く遼東方面に滞住して居たがためと見るべきであらう。何れにしても高句麗人の住む高句麗本土に移住した靺鞨は必ずや相当に居り、遼東に留住してゐた粟末靺鞨も全体的には決して寡少ではなかつたと想われる。

大高句麗が滅んで遼東の支配が大唐に帰すると、此の唐の支配を嫌つた遼東の高句麗人は統々と靺鞨や突厥の間に散亡した。遼東に移住して高句麗人化してゐた粟末靺鞨人も高句麗人同様に、或は恐らくより以上に、競つてその故地に散亡したであらう。然し残らず散亡したわけではなく、既に生活を定着させてゐた關係から残留したものも必ずや何ほどかは居たであらう。それらの残留者は、小高句麗の建国後は当然その支配下に組入れられたであらう。そして彼等は益々高麗人と同化し、粟末靺鞨人としての存在は政治的にも社会的にも殆んど認められなくなつて行つたのではないかと思われ。事実、小高句麗国内に於ける粟末靺鞨としての事跡は全く見出せないのである。

(3) 漢 人

唐初、大高句麗国の領内に相当数の漢人が居たことは、冊府元龜^{卷一}帝王部・来遠門・武徳五年の条に

賜高麗王建武書曰。中略。今二国通和。義無阻絶。在此所有高麗人等。已令追括隨即遣送。彼処有此国人者。王可放還

中略。於是建武悉搜括華人。以賓礼相送。前後者万数。帝大喜。

とあるに依つて窺知せられる。この時、唐から高句麗に還送した高句麗人は主として隋の煬帝の遠征の際に遼東から俘獲して帰つたもので、反対に中国に還送せられた漢人もその時高句麗に捕虜となつていたものと想われ、いわば此れは捕虜の交換であつたと解せられる。但し此の返還漢人が捕虜の全部であつたかどうか。隋軍の大敗走に対して僅かに万余の漢人返還数は少きに過ぎる感が深い。然し此の万余の返還に唐の皇帝が満足し喜びを表明したのは帰国を望む高句麗領内の漢人、即ち中国人意識を強く抱いている漢人が必ずしも多くなかつた様な印象をうける。

貞観十九年以後二十余年間にわたり七回も遼東に進攻した唐軍が此の地方で漢人を拮拾して帰つたとの所伝は全く見えない。このことも亦遼東に居住する漢人、特に帰国を望む漢人が殆んどいなくなつたとの印象を受ける。長く此所に住んで定着した漢人は若干いたのかも知れないが、それも多くなかつたのではないかと思われる。遼東は遼西を経て幽州に通じ、又海上の交通も開けていたのであるから、此の地方に漢人が居なかつたと考へるのは危険であるが、勢力として認めらるに足る漢人の集団は存在していなかつたのであろう。

先秦時代から兩漢時代にかけては此の地方は漢人の大いに入植蕃衍する所となつていた。前漢の遼東郡と第二玄菟郡との地はほぼ小高句麗の領域に当るが、漢書^{卷二}地理志・幽州の項に依れば、二郡の戸口は

- (1) 遼東郡 五五、九七二戸 二七二、五三九口
(2) 玄菟郡 四五、〇〇六戸 二二一、八四五口

と伝えられ、合計十万余戸五十万口弱となる。後漢書^{卷三}地理志に依れば

- (1) 遼東郡 六四、一五八戸 八一、七一四口
- (2) 玄菟郡 一、五九四戸 四三、一六三口

とあるが、この遼東の口数と玄菟の戸数は明かに誤脱があつて信用できない。仮に遼東の戸数と玄菟の口数とに依つて推算すると、両郡の口数は四十万に近い口数となる。この様な前後両漢の大戸口がすべて純漢人であつたかどうかは判らないが、漢人がその少からぬ部分を占め、従つてその総数のかなり大きかつたことだけは充分察せられる。後漢末に此の地方に興つた公孫氏政權はこうした漢人の勢力を基盤とし、更に楽浪方面をも併せて東海に雄視していたものである。晉書^{卷一}高祖宣帝紀（司馬懿）・景初二年（二三八）の条に依れば、当時は未だ曹魏の宿将であつた彼が公孫氏を滅して収めた戸口は四万戸三十万口であつたという。勿論、これには楽浪・帶方二郡が含まれているが、それにしても尚遼東の漢人は相当有力であつたことが窺われる。所が晉書^四地理志を見るに、平州五郡の戸数は

- (1) 楽浪 三、七〇〇 (2) 帶方 四、九〇〇 (3) 玄菟 三、七〇〇 (4) 遼東 五、四〇〇 (5) 昌黎 九〇〇

と伝えられ、総計二万戸にも足らなくなつてゐる。口数は伝を缺き、全く不明である。然も此の戸数は半島を含めており、その減少の甚しいのに驚く。これには、朝威不振による戸籍の不備、高句麗の侵占による領域の減縮など、色々の原因があげられるが、何れにしても漢人勢力の減退を示すものに外ならぬ。西晉末になると、半島は勿論、遼東の大部分も高句麗の有に歸した。やがて遼東は鮮卑と高句麗との分争地となり、最後に高句麗の完全占拠となつた。かく大觀するならば、西晉以後の遼東は漢人の衰退と高句麗人の侵占繁衍との交替に入り、隋代唐初に至つて高句麗人の極盛時代を築き、これが高句麗を滅した唐の安東都護府から小高句麗建国の段階に於いて高句麗人の衰退期に向つたといふことができる。唐が安東都護府の下に遼東の經營に大きな努力を注入し乍ら、然も終に功を成し得なかつたのは、此の政治的進出を支える基盤としての現地漢人の勢力が地を払つていたことに最大の原因があるといえよう。小高句麗時代に入つても漢人の大

量進出を見た形迹は無く、従つて小高句麗国の民族構成に於ける漢人の勢力はさしたる比重を有つていなかったといふことになる。但し漢人が絶えて全く居なかつたとはいえず、又中国文化の影響が弱かつたと見ることも慎しまねばならぬ。

(4) 百 濟 人

資治通鑑^{卷二}唐紀・儀鳳元年二月甲戌の条に

徙安東都護府於遼東故城。徙熊津都督府於建安故城。

とて、平壤の安東都護府を正式に半島より遼陽に退移することを決定すると共に、先に滅した百濟の故領遺民を統治する為に安東都護府の下に置いていた熊津都督府をも遼東の建安故城に移したと伝えている。建安城は蓋平の東北二邦里余に在る石城山、一名高麗城子に比定せられている。此の地は建州都督府として遼東に移つた安東都護府に属し、延いては小高句麗十四州の一とせられていた所である。上文の続きを見るに

其百濟戸口。先徙於徐・兗等州者。皆置於建安。

とあつて、百濟の戸口は、先に唐が百濟を滅した際に中国内地に俘送していた者をも併せて此所に送り集めることとしたという。唐は百濟人と共に倭・耽羅等の捕虜をも連去つたが、その数に就いては筆者は究明を得ていない。高句麗の例から推して、百濟人も反唐分子が選り出されて中国に連れ去られたものと推想せられるが、果してそれが高句麗人の如く万戸を以て計えられる多数であつたかどうか、全く判らない。然しとにかく若干の百濟人が建安州の地に送り込まれたのである。資治通鑑の同卷には更に翌二年二月丁巳の条に

以工部尚書高藏為遼東州都督封朝鮮王。遣婦遼東。安輯高麗余衆。高麗(人)先在諸州者。皆遣与藏俱歸。又司農卿扶余隆為熊津都督封帶方王。亦遣婦安輯百濟余衆。仍移安東都護府於新城。以統之。

とて、遼陽の都護府を新城に移し、高藏を遼東に帰して高句麗人を統轄せしめ、これら一連の東方政策の一環として、百

済の王統扶余隆をも遣帰して百済の余衆を統撫せしめんとしたとあり、続いて

時百済荒殘。命隆寓居高麗之境。

とて、百済の本国は荒殘していたので、扶余隆は本国に行かれず、よって高麗の境に寓居せしめたといっている。本国荒殘とは百済の故地が新羅に奪われていたことをいい、高麗の境（管内の意味）とは、この場合、建安州の地をいっているであろう。高麗の遣帰は唐が彼に高句麗の復興をさせる為であった。それは高麗の謀反という事で失敗に帰したが、復興の国王を送り出した遼東の地を指して高麗の境といったのは当然で、建安州はその西南端の地に当たっている。そこには前年に唐の内地に徙されていた百済人が再遷せられていた。扶余隆はその統帥としてそこに送り込まれたのである。扶余隆の遼東遣帰は冊府元龜を初め、新旧両唐書の百済伝等、当時の主要文献には悉くこれを掲載してあるが、その後の消息に就いては何れも一様に「扶余氏遂亡」とあるのみで、詳細は判明しない。ただ新唐書^{卷二〇}百済伝のみは
武后又以孫敬襲王。

とて、武后時代までその王統の統いていたことを記したのち、「百済遂絶」と記している。思うに、建安州の扶余氏の王統は、唐が新城の安東都護府を放棄し、小高句麗国を建てしめ、これに遼東の統治を一任して此の他を引揚げる頃まで、ともかくにも続いていたのである。然し恐らく唐が再び此の地を羈縻するに至った開元の初め頃には、「遂絶」えていたのであろう。そして此の王統の絶滅はこの百済人の散亡と運命を共にしたものであろう。散亡の次第は判らないが、元来少数であった彼等は主民族である高句麗人の間に吸収せられて終わったのであろう。

II 開元末・天宝初年の九州増領と純通古斯系靺鞨人の入居

小高句麗国は開元末・天宝初年の交に、越喜・衛樂・舍利・居素・去且の五都督府、諸比・鉄利・抃涅・押漢の五州、合計九州を増置した。このうち越喜等の若干州は開原以北におかれ、それだけ小高句麗国の領土は拡張せられた。又鉄利

・弘湮等の若干州は開原以南の遼河沿流域におかれ、それだけ従来の領土が充実せられた。そしてこれらの諸州は渤海の北進に抵抗し、敗れて亡命し来たった純通古斯系の靺鞨諸派であった。

当時の純通古斯系としては、伊通河流域との合流点より下流の北流松花江や拉林河下流域によった達姪靺鞨（遼史の達盧古女直）、安出虎水（阿勒楚喀河）流域によった鉄利靺鞨、その東方の瑪爾河流域に拠った越喜靺鞨、瑚爾喀河流域以東に拠った弘湮靺鞨、三姓以東の松花江最下流域に拠った黒水靺鞨等が最も著れ、又瑚爾喀河の流域に拠った弘湮は虞婁靺鞨と称せられていた。これらのうち、黒水を除く他の靺鞨は悉く渤海に征服せられてその直轄領民とせられた。それから被征服諸族の最東方に居た弘湮が遙々遼東に亡命し、その西の越喜・鉄利も来奔してそれぞれ九州の一を成している所から推せば、達姪の中にも来奔者があつたであろう。これらの靺鞨諸族はそれぞれ数多の部族に分れ、それらの部族は、小は数百戸から千数百戸、多くも数千戸を出でなかつた様で、必要に応じ地域的に諸部聯合の團結を形成していた。弘湮・鉄利・越喜三州以外の諸州名は恐らく部族名もしくは聯合名を負うていたのであろう。弘湮・鉄利・越喜は部族名としてよりも種族名として知られた名称であるから、此の州名は種族名を負うたものと思われる。他の州が部族名に因んでいられるのに対し、三州のみが種族名を負うている理由は判らないが、或は思うに、彼等の亡命を受けた唐では、一部族集団もしくは聯合集団が大挙来奔した者を以てその集団名を冠した州をおき、伍々散入した者は同種族別に從つて集団置し、種族名を冠した一州としたのかも知れない。此の推測の当否は別として、小高句麗國が開元・天寶の交に少からぬ純通古斯系靺鞨諸族を迎え入れ、彼等をその西から西北の境上、即ち遊牧勢力との接線附近においたことは紛れない史実である。

註

1 全部の住民が残らず俘えられる筈はないから住民数は俘獲数よりずっと多く見なければならぬ。

2 満洲歴史地理卷一、松井等氏「隋唐一朝高句麗遠征の地理」。

3 此の兵數・糧石數・俘獲數等は親征門に無く、卷一二六・帝王部・納降門に見えている。

- 4 蓋牟・遼東・白巖・卑沙諸城の攻陥に関する記事は資治通鑑^{卷九八}貞觀十九年の条、新旧各唐書の高麗伝等にも見えているが、伝には口とあるべきを戸としている。
- 5 同じく資治通鑑や伝にも見えている。以下に引く所も大抵同じである。
- 6 満洲地理歴史研究報告^{第一册}所収、池内博士「高句麗討滅の役に於ける唐軍の行動」は此の十城の位置を最も詳しく論じているので、専らその比定に従った。
- 7 註6の論文の末尾に掲載せられているものによる。
- 8 このことに就いては別に専考したい考えである。
- 9 資治通鑑^{卷九八}唐紀・貞觀十九年六月の条に「初莫離支遣加戸城七百人戍蓋牟城」とあるはその一例である。
- 10 資治通鑑^{卷九八}に同記事あり。
- 11 このことに就いては史淵四二輯の拙稿「粟末靺鞨の対外関係」第二節「高句麗との関係」参照。
- 12 同 前。
- 13 原文には高延壽の名を脱しているが、続いて唐に降った時の記事には彼の名が見えている。資治通鑑^{卷九八}はこれを補っている。
- 14 同書^{卷一}帝王部・納降門、同^{卷二五}同部・料敵門、資治通鑑^{卷九八}等に同記事あり。
- 15 恐らく輝發河その他の住地から従軍していた者であろう。遠く安市城(今の海城東南)にまで来ていた彼等の少からぬ者は或は専業兵士として遼東方面に住みついていたかも知れない。
- 16 この遼水・南蘇の屯駐兵に就いては、前出の「粟末靺鞨の対外関係」の附説「總章元年唐將薛仁貴の攻陥せる扶餘城」に詳考している。
- 17 上述の散亡に就いては既に詳述した所である。
- 18 延津州と豊富城との比定に就いては前出「總章元年唐將薛仁貴の攻陥せる扶餘城」参照。
- 19 渤海の始祖大祚栄に就いては従来色々の見解が立てられているが、筆者も亦更めて考究したい考えである。
- 20 册府元龜^{卷七〇}帝王部・来遠門、新旧各唐書の百濟傳等に同一記事あり。
- 21 別に発表すべき拙稿、「靺鞨七部の内部構成」参照。
- 22 拂涅・鐵利・越喜等はその内部に影しい部族を含む種族名として用いられているが、鐵利・越喜はもと安車骨靺鞨の一部族名より種族名となつたものではないかと思われる。